

氏名	王 新 艷		
学位の種類	博士（歴史民俗資料学）		
学位記番号	博甲第 210 号		
学位授与の日付	2016 年 3 月 31 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
学位論文の題目	現代における中国華北農村家族の変容 －山東省臨沂市平邑県武台鎮旧水溝村を事例に－		
論文審査委員	主査	神奈川大学	教授 小 熊 誠
	副査	神奈川大学	教授 森 武 磨
	副査	神奈川大学	教授 安 室 知
	副査	桜美林大学	教授 中 生 勝 美

## 【論文内容の要旨】

本論文は、現代における華北農村を対象に、新中国成立の 1949 年から現在までの「一人っ子政策」や土地制度などの政策に対して、それぞれの家族がどのように変化していったのかについて一村落を調査地にしてインテンシブに調査し、研究した論文である。

本論文の構成は、以下の通りである。

### 序章

- 第 1 節 研究背景と問題提起
- 第 2 節 先行研究及び研究目的
- 第 3 節 調査地及び実地調査
- 第 4 節 論文の構成

### 第 1 章 家族構成の変容：「多子多福」から「一人っ子」へ

－1980 年代から「一人っ子」政策による「一家子（人）」の変容－

はじめに

- 第 1 節 「一人っ子」政策の四段階及び旧水溝村の対応
  - 第 2 節 「一人っ子」政策による「一家子（人）」の変容
  - 第 3 節 家戸群レベルの「一家子（人）」の変容－家産分配の事例を中心に
  - 第 4 節 祖先祭祀群レベルの「一家子（人）」の変容－鬼節における祖先祭祀の変化を事例に
- おわりに

### 第 2 章 家計収入源の変容：「村内」から「村外」へ

－1990 年代から出現した出稼ぎブームによる家認識及び家産分配の変容

はじめに

- 第 1 節 現代における旧水溝村の出稼ぎの実態
  - 第 2 節 出稼ぎによる住居形態及び家産分配の変革
  - 第 3 節 家認識の変化－春節の祖先祭祀を事例に
- おわりに

### 第3章 家産範囲の変容：地主から「新地主」へ

－2000年代から土地産権の新たな変化による家族形態の変容

はじめに

第1節 新中国成立以来の中国土地制度の変革

第2節 土地の取り扱い方の変容から分家時期の変容を見る

おわりに

### 第4章 家屋構造：「二」から「一」へ

－2000年代末から「村改社区」政策による家屋構造の変容

はじめに

第1節 「村改社区」について

第2節 二重住居構造から単一住居構造へー「院子」(ユアンズ)の消滅

第3節 「院子」における人と神の関係

第4節 「院子」と人間関係

おわりに

### 終章 中国華北農村の変容にみる家族の解体と再編

はじめに

第1節 改革開放以降華北農村家族の解体

第2節 中国華北農村家族の再編

第3節 華北農村の「現代家族」

あとがき

第1章では、まず、中国における「一人っ子」政策を、次の4期に分けた。第1期は、準備期1953年の第1回人口センサスから1979年の「一人っ子」政策実施までを【「一人っ子」政策】準備期：毛沢東時代とし、第2期を【発端期：1979年～1980年代】、第3期を【緊迫期：1989年～2000年】、第4期を【弛緩期：2010年～】とした。その中で、中国の人口増加の推移を表で表わし、1953年に1世帯当たりの人数が4.33人あったものが、2010年には1世帯当たり3.10人に減少し、合計特殊出生率も1953年の5.81人から2010年には1.18人に減少したことなど中国の家族をめぐる大きな変化を確認した。

調査地は山東省武台鎮の旧水溝村であり、村落レベルでの各時期の家族変化について整理した。中国農村における伝統的家族は、多くの息子がいれば「承継香火」であり、先祖祭りが継承されて幸せになる「多子多福」が理想とされていた。それが、「一人っ子」政策が実施されると大きく変化することになり、旧水溝村における実地調査によって具体的に事例を挙げて分析した。

「一人っ子」政策は、いかなる場合でも子どもは一人しか生めないという政策ではない。第1子が長女であれば、第2子を生むことができた。理念的には、①父母+長男、②父母+長女、③父母+長女・長男、④父母+長女・次女という家族構成が可能であり、実際、調査地でも「独女世帯」や「双女世帯」が増えた。

山東省農村においては、一家を表わす言葉として「一家子」という表現がある。それは、機能と構成によって「家戸」→「家戸群」→「祖先祭祀群」→「宗族」と多層的に拡大する。つまり、父母と子どもたちで「家戸」が形成され、子どもたちが分家してそれぞれ独立した「家戸」を構成すると「家戸群」を形成する。父方従兄弟などのいくつかの「家戸群」で祖父母などを一緒に祖先祭祀をするとその単位は「祖先祭祀群」であり、共通する父方遠祖をもついくつかの「祖先祭祀群」の集団は「宗族」となる。しかし、「一人っ子」政策が開始されると、この構造に大きな変化が起

こった。

家戸レベルでは、家族員の数「多子」から「一人っ子」あるいは「二人子」になり、世帯当たりの人数が減少した。「独男」世帯だけでなく、「独女」・「双女」世帯も増加している。家戸群レベルでは、伝統的には分家は男子均分であり、家戸群を形成したが、一人息子で分家がなくなったり、娘が財産相続できるようになったり、また「親+娘・婿+孫」という双系血縁の家戸も現れた。分家という家族の分裂と統合が少なくなり、家戸群の規模が縮小したり、消滅したりすることになった。祖先祭祀は、旧暦春節、清明節、十月一日の鬼節があった。父方従兄弟で祖先祭祀群を構成して、従兄弟同士の男子のみで一緒に祖先祭祀を行なってきたが、出稼ぎが始まると従兄弟が帰郷できずに兄弟だけで墓参りするとか、独男であるが帰郷できないので親が墓参りをする、あるいは女子しかいない家戸の場合は女子が墓参りに行くように変化して来た。このように、家戸→「家戸群」→「祖先祭祀群」それぞれの構成に大きな変化があり、その機能も大きく変化していることを具体的な実地調査資料をもとに分析した。

第2章では、1990年代に始まった旧水溝村の出稼ぎの状況について整理し、その上で6つの家族の事例から居住形態及び家産分配の変容について分析した。出稼ぎに伴う住居の形態は、単身出稼ぎ、夫婦出稼ぎ、挙家出稼ぎの3つのパターンが存在する。その出稼ぎのパターンによって、「両親+嫁+孫」、「祖父母+孫」、「両親のみ」という居住形態が存在し、それがライフサイクルによって変化していく。伝統的な華北の家族は、兄弟による財産の均分相続による①「厳密性」と、兄弟が交代で老親の扶養をする②扶養の均等性があったが、出稼ぎによる居住形態や家族形態の変化によって①と②の法則が変化した。息子の出稼ぎによって親と嫁が畑を共同利用したり、息子が挙家離村したために畑を分けなったり、厳密な家産分配が曖昧な状態になっている。また、親の近くに住む息子が親の扶養をし、出稼ぎした息子は親への仕送りはするが扶養はできないので、家産分与が親の扶養をする息子に偏り、家産分配が不均分になった。出稼ぎによって居住形態や家族形態が大きく変化しているが、それでも春節や葬式・結婚式、鬼節などには旧水溝村の「家」に帰る。「家」の認識が、伝統的には「同居同財同竈」の形態をもつ生産・生活空間であったものが、非日常的な祭祀・儀礼空間の「家」へと変化したと指摘した。それは、出稼ぎによって都市の不安定な生活を強いられている農民工にとって、安定と安全な空間が必要だという認識をもっていると考えた。

第3章では、まず、中華人民共和国成立以降の土地制度について4期に分けて整理した。(1)1949-1955年の土地私的所有制、(2)1956-1978年の土地全民所有(公社所有)制、(3)1978年以降の家庭生産請負責任制の村集団所有制、(4)「新地主」の段階に分け、それぞれの段階で旧水溝村において農家における土地の意味がどのように変化したかを述べた。とくに、家族のライフヒストリーから、それぞれの時期における家産の位置づけ、農家の土地に対する権利、分家の契機、家産分配の方法などを整理し、土地制度の変化が家族にどのような影響を与え、それがどのように変化したかを整理した。1993年に土地の使用権を譲り渡すことが法律上可能になると、出稼ぎで荒れた土地の使用権を借り受け、広大な農地を経営する「新地主」が出現した。これによって、土地の家産としての性格が強まったことを示している。従来の家族は「同居同財」が基本であり、分家によって財産を分けて「分居分財」となり、それぞれの家族を形成した。現代では、一人っ子で分家する必要はないが、出稼ぎで分居する「分居同財」家族が増えている。このような家族は、以前においては存在せず、新たな土地制度や出稼ぎなどから出現した新しい家族形態と指摘できる。

第4章では、中国における高度経済成長に伴って生じた農業と工業、農村と都市との経済格差を解消するために、政府が2006年から取り組んでいる「村改社区」政策に、旧水溝村がどのように対応したかを検討する。伝統的な家屋は平屋の四合院造りで、四棟の家屋に囲まれた真ん中には「院子」と呼ばれる中庭があり、そこで農作業や年中行事、人々との談話などが行なわれていた。しか

し、村ではビルの住居を新築し、村人をそこへ移住させた。居住地は農地となり、その面積は増加し、果物栽培の収入も増えた。しかし、以前から「院子」で行なわれていた年中行事を行なう場所が消滅し、部屋の前やビルの前などで行なうように変化した。また、「院子」で行なわれていた近隣の人々との交流が、ビルに住むことによって希薄になっている。「院子」は、神と人そして人と人の交流の場であった。「村改社区」政策によって、住居構造は「院子+部屋」の二重構造から「部屋のみ」に変化した。「部屋のみ」の単一住居構造は閉鎖性が強くなり、従来の個人一家一村における人間関係が変化した。農村における現代化の一環としての「村改社区」政策は、農村の住居や経済など表面的な変化を示すだけでなく、社会構造や人々の日常生活・文化、さらに人と神の関係まで影響を与えていることを分析した。

終章では、1980年代の改革開放から現代までの、中国国家による「一人っ子」政策や「村改社区」政策などによって華北農村家族がどのように変容したかについて、第2章から第4章までの議論を全体として分析した。華北農村の伝統的家族は、夫婦家族から始まり、核家族、直系家族、そして複数男子が結婚後同居することによって複合家族に展開する。それが、男子均分による分家を契機に、核家族群に分裂する。分裂後の老親扶養は、兄弟による均分負担となり、祖先祭祀はすべての男子が義務をもつ。「一人っ子」政策が実施され、「多子多福」から「一人っ子」政策になると、「独男」家族が増えただけでなく、「独女家族」や「双女家族」も増加し、伝統的な農村家族を維持することは出来なくなり、大きな変化が起こった。

家族構成だけでなく、1990年代からの出稼ぎが増えると、居住形態も「両親+嫁+孫」や「両親+娘+孫」、「両親+孫」など多様になり、男子による分家もほとんどが行なわれなくなり、娘が家産の相続をすることになって、「娘不分与」の伝統的な家産分配ルールが解体した。また、祖先祭祀も、兄弟従兄弟など男子のみで行なっていたのが、「一人っ子」政策によって従兄弟がいなくなり、男子不在のため父親あるいは母親、そして娘が祖先祭祀を行なうように変化した。さらに、「村改社区」政策によって中庭である「院子」が消滅すると、人と人、家族と家族、人と神の交流の場が消滅し、伝統的な血縁関係、地縁関係が薄れてきた。

改革開放以降、華北農村家族が国家や市場の変動によって、外発的な変化を余儀なくされ、伝統的な華北農村家族が解体する局面と直面している側面をとらえることができた。しかし、旧水溝村のいくつかの家族の事例を見ていくと、華北農村家族が絶えず内発的にその変化に対応している側面も見ることができる。例えば、父系血縁が弱くなったことは確かだが、厳密な父系血縁のかわりに父-娘-孫のような双系血縁を強調するようになった。また、家族の居住形態は親家族と子家族が厳密に「分家」することは無くなったが、双方の家族の協力関係が強くなり、家族の集団性の強化が見られる。そして、村の人間関係の発生場所であった「院子」の消滅によって、血縁関係、地縁関係の人間関係が弱まったが、社区の施設を通じた新たなグループ関係が生じるようになった。

このように、伝統的華北農村家族の解体が進行している一方、新たな華北農村の「現代家族」が再編されている点を指摘した。

## 【論文審査の結果の要旨】

華北農村における家族の研究は、戦前から現代に至るまで法社会学、社会学、歴史学、人類学などさまざまな研究分野から多くの研究蓄積がある。その中で、1980年代以降の「一人っ子」政策から現代に至るまで、中国家族がどのように変化したかについては、国家のマクロな視点の研究と村落のミクロな研究あるいは核家族の動態的な研究などがあるが、本論は後二者の立場からの研究である。中国ではマクロな研究が多いのに対し、日本では実地調査による研究がある。例えば、細谷昂をはじめとする日中調査団が華北において合同調査を行ない、『沸騰する中国農村』（1997年）と『再訪・沸騰する中国農村』（2005年）を表わして、華北農村の農民の従事する職業、土地の利用方式、家族の動態を分析している。「一つの家庭」のレベルでいくつかの側面に分けて研究する手法を参考にしている。本論は、この研究を参考にしながら、中国華北農村である村落を対象として、そこでの家族の変容について実地調査資料を巧みに援用して分析している。

新中国成立以来、中国では土地制度や「一人っ子」政策などの大きな改革を実行してきた。この改革は、政治・経済だけでなく中国社会をも大きく変えてきた。その中で、具体的な家族がそれらの政策に対応してどのように変化してきたかを具体的に捉えるのが本論の目的となっている。法学・経済学・社会学などで家族を分析する場合、数字やアンケートの分析を行ない、家族の実態調査を利用してその理念型を議論する研究方向を持つ。それに対して、本論は民俗学の視点から現代の中国家族を分析しようとした。中国における民俗学は、「口承文芸」あるいは「口承伝承」の研究が多く、このような家族研究はほとんど先行研究がない。それに対して、日本における民俗学は、人々の「生活」を研究対象とし、家族の研究も長い歴史をもつ。したがって、本論では日本民俗学の視点から現代中国の家族を分析した点が特徴と言える。一般的には、中国の政策や出稼ぎという現象に対して、家族がどのように変化したかを客観的に分析する研究視点がとられる。それに対して、本論では客観的に家族の変化を整理したうえで、家族の視点に立ってその変化がその家族にとってどのような意味をもつのかを検討し、分析した点が従来の研究にあまりない研究視点であり、その点は大いに評価できる。

国の政策に対応して、旧水溝村の人々がどのように変化しているかが本論の論点になる。その例として、旧暦十月一日の鬼節の墓参りをあげることができる。現在は、「一人っ子」世代の若者が成人し、あるいは結婚してこの儀礼を行なう世代になっている。この世代は、進学したり、出稼ぎに出たりして農村での慣習を体験したり、参加する機会が少なかった。それでも、墓参りに行く若者世代はいるが、この時期は清明節のように中国全体の祖先祭祀の時期とは異なるので、休日はない。そのため、供物などを準備する時間がないため、従来調理していた供物は魚、豚肉、鶏の三牲などを生のまま供える。また、墓前で燃やす紙銭を作る時間がなくて市販の紙銭を使うなど、簡略化される。それでも、祭祀を通して祖先の加護をもらいたいという観念は消えることはない。その延長で、出稼ぎに出た若者が、鬼節に帰省できない場合が多々ある。そのときは、老父が行なっている。父が亡くなった場合は、老母が行なうこともある。ここで、男子による墓参りという習慣は崩れている。さらに、女子しかいない場合は、娘が父や母の墓参りを行なうようになった。娘は結婚すると実家の「一家子」のメンバーとはみなされなかった。したがって、祖父母の墓を一緒に祀る祖先祭祀主体群としての「一家子」のメンバーでもなかった。「一人っ子」政策によって「独女」「双女」家族が増えており、それによって「一家子」という旧水溝村における家の単位とその機能が崩壊するわけではなく、女子をその中に組み込むことによって祖先祭祀を継続させ、そしてその構成に女子も入れることによって、この家観念を継承させようとしているという指摘は、まさに個

別の家族の動きから家族の変化をとらえつつ、伝統的な家観念の変容を描き出している。

同様に、「一人っ子」政策によって家族構成が変化し、出稼ぎによって家族のあり方が大きく変わっている。伝統的に同一家屋に住み、一緒に農業をする「同居同財」家族が基本であったものが、息子が出稼ぎに出て、父親と嫁と一緒に農業をするという家族も出現している。息子が成人しても、一人っ子であるため土地を分けることはない。このような家族が増え、「分居同労働同財同食」という家族生活が営まれ、従来とは異なる「分居同財」家族が出現している点の指摘は、華北農村家族の変化を明確に示している。それにとどまらず、出稼ぎした息子あるいは息子家族、「独女」「双女」であれば娘が、冠婚葬祭にはなるべく帰省している実態を实地調査から引き出し、そこから「家」の認識が、伝統的には「同居同財同竈」の形態をもつ生産・生活空間であったものが、非日常的な祭祀・儀礼空間の「家」へと変化したという分析は、社会学的な家族の分析とは異なり、現地の人々による家観念まで議論した点で民俗学的な研究として高く評価できる。

しかしながら、逆に言うと、このような家観念がどこまで一般化できるかという点は、まだ曖昧さが残っている。更なる資料の蓄積と数字も含めた分析が必要であり、その作業を積み重ねることによって現代家族として客観的な位置づけが可能となる。また、華北と華南ではその環境だけでなく家族のあり方も異なる部分がある。本論は、華北農村家族を対象にしているが、さらに別の地域とも比較して、現代中国家族の一般化の検討が必要だと考えられる。

以上、本論は、現代中国家族の一般化まではまだ検討が必要だが、華北農村の家族については、その実態に関して实地調査を踏まえて分析しており、さらにその視点も実際の住民の視点から捉えようとしており、従来の中国家族研究に対して本論の研究の特殊性は評価できる。本論の審査結果に基づき、王新艶氏に博士（歴史民俗資料学）の学位を授与することが妥当であると認める。